保育学生が園児から受けたプライベートゾーンに関する言動・行動と対応の実態　第２報
～保育所での保育実習・幼稚園での教育実習を終了して～

Student Teachers' Reactions to Children's Words and Behaviors Concerning Privates Zone NoⅡ

（2013年３月31日受理）

西尾　敏子*　原田　眞澄
Toshiko Nishio　Masumi Harada

Key words：園児，性の健康教育，プライベートゾーン，保育学生

要　　旨

保育学生２年次学生133名を対象にアンケート調査を行った。65.3％の学生は，ボランティアや実習で園児のプライベートゾーンに関する言動や行動を体験していた。第１報では54.3％であった。ボランティアでは，意識的な関わりは皆無であったが，特別講義を受けた後は，保育所での実習では，８割を超える学生，幼稚園での教育実習では９割を超える学生が，園児のプラベートゾーンに関する言動や行動に対応していた。さらに，保育所実習での後に学生の体験をもとに２回目の講義を行い幼稚園での教育実習に臨んだところ，学生の園児への対応の内容が，単純な言動や行動の制止から，プライベートゾーンの説明などの理由づけを行う意識的なものへと変化しており，講義の効果が確認できた。

は　じ　め　に

性教育は学校教育の中で行われているのがほとんどで，就学前の幼児期に保育所や幼稚園や家庭で積極的に実施している所は少ないのが現状である。しかし「性教育」とは自分の性について考えさせる教育であり，自分のからだと心の動きを知る機会であり，子どもたちに「安全」「科学」「健康」を伝える性の健康教育である。[1] まさに幼児期においても必要とされる教育である。特に力の弱い子どもたちは，性的な暴力の被害に遭いやすい。それは，性的暴力が「同意がないにもかかわらず他人を乱用し，性被害を与えるもので，力と支配を感じたいが為に自分より力の弱い物を乱用する。これを性的な形で表すもの」[2] であるためである。加害者は自分の身近で乱用しやすい相手を選ぶため，力の弱い子どもは性的な暴力の被害に遭いやすいのである。特別な子どもが被害に遭うのではなく，男児女児にかかわらず，どこにでもいる普通の子どもが被害にあう。力の差を悪用するために，小さな子どもも例外ではない。

性的暴力は，被害者に甚大な影響を及ぼす。発達途上の子どもが被害にあう場合には長くその子の人生に暗い影を落とし，心身の健康に多大な悪影響を及ぼす。そのため性的暴力の被害にあってからのケアではなく，まず予防することに力点が置かれなければならない。

中国短期大学（以下「本学」と称す）では，子どもに対する性の健康教育の意義を理解し，平成16年度より保育学生２年次に特別講義として，主にメグ・ヒックリングの理論をもとに，「子どもに対する性の健康教育のあり方」という特別講義を行ってきた。平成24年度で９年目を終えた事になるが，平成16年度の実態調査以来，学生の状況の変化について調査できていないので，ここで園児から受けるプライベートゾーンに関する言動や行動及び学生の対応について調査するとともに，特別講義の有用性や今後の課題を明らかにしたい。

*丹羽病院助産師

表１．特別講義について

特別講義について
○日時　第１回：20012年５月10日（保育所実習前）
　　第２回:同年６月22日（幼稚園教育実習前）
○場所　中国短期大学
○対象　中国短期大学　保育科学2年次生133名
○内容
　第１回
　・性の健康教育について
　・子どもの性的な発達と発達課題
　・健康教育の具体的内容
　　（プライベートゾーン･性器の名前と役割等）
　第２回
　・保育所実習での園児の性的言動・行動の実態
　・学生の対応の実際
　・対応できた事例できなかった事例の検討
　・年齢に合わせた対応、感情の処理など

研　究　目　的

１．学生が保育所での保育実習や幼稚園での教育実習の中で経験している幼児からのプライベートゾーンに関する言動や性的行動について実態を明らかにする。
２．保育所実習や幼稚園教育実習で体験した，幼児からのプライベートゾーンに関する言動や性的行動に対する学生の対応を明らかにする。
３．特別講義の有用性を検討し課題を明らかにする

研　究　方　法

「保育所実習」や「幼稚園教育実習」の終了後，教育課程がほぼ終了した時点でアンケート調査を行い，その結果をもとに考察する
（期間）2012年１月23日から25日
（対象）本学保育学科２年生133名
（方法）質問紙によるアンケート調査留め置き法
（アンケートの内容）
　１．属性
　２．特別講義を受ける前のボランティア体験の有無
　　ボランティアでの園児からの性的な言動・行動と対応
　３．保育実習での園児からの性的な言動・行動と対応
　４．幼稚園実習での園児からの性的な言動・行動と対応
　５．特別講義で最も印象に残ったこと
　６．受講してよかった事の自由記載
（倫理的配慮）アンケートは無記名とし，調査への協力は任意とした。

調　査　結　果

１．アンケートの回収率・属性
　アンケートの回収率は73.7%，有効回答率68.4%
　対象属性は男性５名　女性86名
２．特別講義を受ける前のボランティアでの園児からの性的な言動・行動と対応
３．保育実習での園児からの性的な言動・行動と対応
４．幼稚園実習での園児からの性的な言動・行動と対応
　実習前の保育ボランティアにおいて園児からプライベートゾーンに関する言動および行動（以下「性的な言動」,「性的な行動」と称す）に遭遇した学生は，34.7%であり，保育所実習では同28.6%，幼稚園教育実習では同33.7%であった。（表１）一見少ない数のように見えるが，保育所と幼稚園とで共通して体験している学生を除くと，延べ人数は55名となる。実習前のボランティアで体験した学生も合わせると（保育所実習，幼稚園教育実習とボランティアの共通した体験者は除外する），園児からの性的な言動や性的な行動を体験している学生は64名となり，実に65.3%にのぼることが分かった。これは,2006年に実態調査した時の54.3%と同程度のもので，保育所・幼稚園とも幼児の性的な言動や行動は続いている事が分かる。保育所より幼稚園での体験者が多いことは，保育所が乳児期のより小さい園児が含まれることと幼稚園が３才あるいは４才からという同年齢の発達段階の似かよった時期の子どもが多い事によるものと考えられる。

表１　園児からう受けた性的言動・行動

	性的言動・行動
ボランティア（実習前）	34.7%
保育所実習	28.6%
幼稚園教育実習	33.7%

年齢構成は，保育所・幼稚園とも年齢が上がるにつれて，性的な言動や性的な行動が増えていた。（図１）

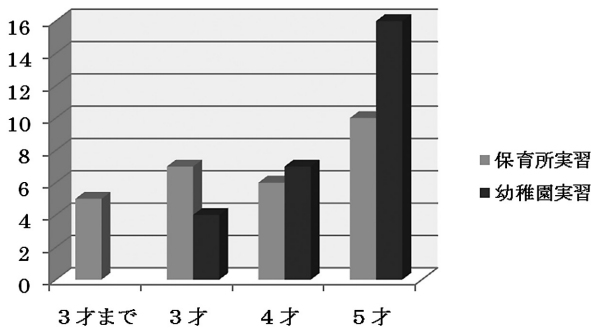

図１　性的言動・性的行動をした園児の年齢

その内容は，性的な言動では，「おっぱい」「胸をさわらせて」など胸に関する言動が保育所では12件，幼稚園では10件と共に多く，次いで「カンチョー」「ちんちん」など性器に関する言動が保育所で４件，幼稚園５件であった。（図２）性的な行動では，実際に胸にさわる，胸を服の上からのぞくなどの胸に関する行動が保育所では18件，幼稚所では14件と共に多く，次いで性器をさわるやズボンの中に手を入れる，両手の人差し指で肛門をつくなどの性器に関する行動が保育所で９件，幼稚園で15件であった。さらにキスをするなど口に関する性的行動が保育所で１件であった（図３）。

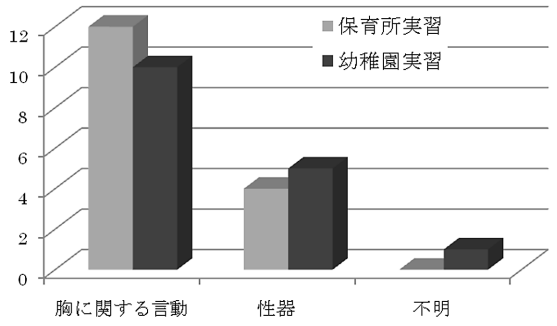

図２　園児から受けた性的な言動

保育所，幼稚園とも性的な言動より性的な行動の実数が多く（図４），胸に関する言動や行動が保育所，幼稚園ともに多かった。性器に関する言動や行動は幼稚園の方が実数が多かった。特に性器に関する行動において幼稚園と保育所での差が大きかった。（図２）（図３）

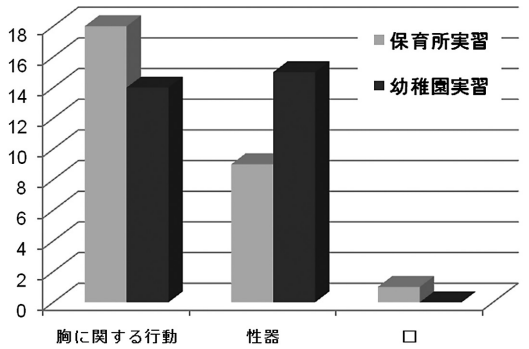

図３　園児から受けた性的な行動

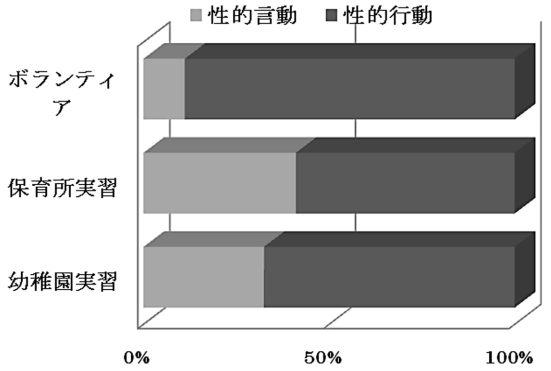

図４　性的言動と性的行動の実習ごとの割合

子ども達の性的な言動や行動に対する学生の対応は，ボランティア実習（講義前）では，学生は幼児の性的な言動や性的な行動に対して，なぜそのような言動や行動をとるのか疑問に思ったり，いやだと思っても子どものする事だからと我慢したり，子どものすることだから大したことではないと考えたりすることが多かった。またそれらの子どもの言動や行動に対して，笑ってごまかしたり，ふざけたり，軽く流したりという対応がほとんどで，「いやだよ」とだけ自分の気持ちを伝えられた学生が数名いる程度であった。自分の気持ちを我慢して何も言えない学生もいた。

保育所実習では講義での学びを生かし，性的な言動に対しては84%，性的な行動に対しては88%の学生が子ど

もたちに対応していた。また，自分の対応の是非やその理由まで考えられた学生もそれぞれ65％，55％といた。ただその対応の内容は，「やめて」「触っちゃだめだよ」など制止する内容を伝えるだけのものがほとんどで69％，プライベートゾーンについて話し，理由も含めて子どもに伝えられたのは19％しかなかった。（図５）しかし，その対応で子どもの態度が変わり，性的な言動や行動をやめた者があり，自分の働きかけで子どもの態度が変わる事があるのだと感じ，学生の自信につながったものもあった。

そこで２回目の講義では，学生が実際に体験した子ども達の性的言動や性的行動の実態と学生たちの対応の概要を知らせた。さらにうまくいったケースとうまくいかなかったケース，対応に困ったケースを提示し，どのような条件が子どもたちに伝える際に必要か考えるよう工夫した。その結果，幼稚園教育実習では，２名を除いてほぼ全員が子どもたちの性的な言動や行動に対して対応していた。対応しなかった１名の学生は，「園児同士の会話の中に性的な言動があったが，子ども同士の会話だから介入する必要はないだろう」と考えての結果だった。対応した学生のその対応の方法は，制止するだけの言葉かけが21％で，講義の内容を生かし理由まで説明する学生の割合は67％（図６）と保育所実習と比較して，理由づけまで行う学生の割合が大幅に増加した。（図５，図６）

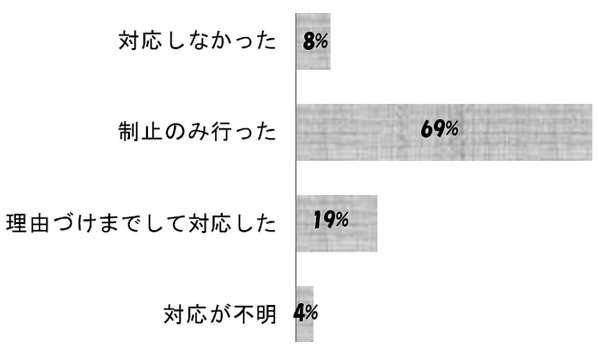

図５　保育所実習での学生の対応

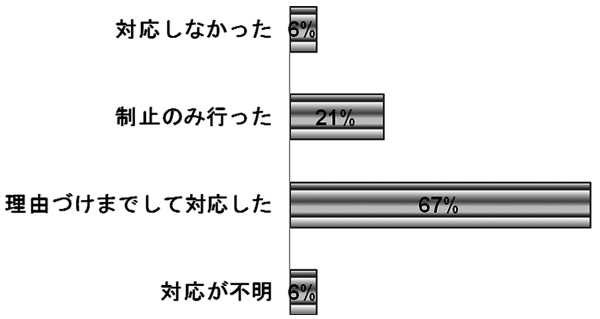

図６　幼稚園実習での学生の対応

一方で園児が自分の性器を触っている場面に数多く接し，どのような対応をすべきか戸惑っている学生や「園児が何度言ってもやめないので，怒ったように注意した」「やめて，そんなことをするともう抱っこせんよ」などの保育者としては不適切な対応の学生もいた。

５．特別講義で最も印象に残ったこと

特別講義を受けて学生が最も印象に残ったと感じた項目は，以下の通りである。最も多かったのはプライベートゾーンに関することである。プライベートゾーン（口・胸・性器）は自分だけの特別に大切な所で，誰かが勝手に見たり触ったりしてはいけないところであり，もしそうされそうになったら「いや」と言っていいという内容を始めて聞き印象に残ったと答えていた。（62％）

次に多かったのは，子どもへの性虐待が増加しているということであった。（21％）続いて，自分の対応の仕方により子どもの性的虐待を救えるということ（14％）性的虐待の具体的事例を聞いたこと（11％）の順であった。

講義の学生達の評価は，肯定的なものが82％，覚えていないが１％，記載がないものが17％であり，概ね良好であった。

６．受講してよかった事の自由記載

アンケートの自由記載では多くのことが書かれていた。これまで性はタブーで幼児に性について伝えるなど考えたこともなかったが，子ども達の性的な言動や行動を講義で聞き，また自身も体験したり，他の学生の体験を聞き，幼児期から性の健康に関心を持ち，取り組むことが必要なのだと認識を新たにした学生が多かった。具体的な関わりの方法を検討し実施することで，安心して実習に臨み，幼児の性的な言動や行動に対応でき自信に

つながった学生もいた。自身ではうまく対応できなかったが，他の学生の体験を共有し対応の仕方を再確認する学生も多くいた。幼児の性的な言動や行動を注意深く観察し，「性化行動」としての可能性（性虐待）がないか，幼児の背景までとらえる必要性を考え，保育士としての専門性のひとつと言及する学生も複数いた。

考　　察

わたしたちは，これまで当短期大学，保育学科の学生に「幼児期における性の健康教育」という特別講義を８年間行ってきた。学生たちは，自身の身体や心を守るための性教育は，内容の多少の差はあれ全員がこれまでの過程で受けてきている。しかし保育士や幼稚園教諭という子どもたちと密接に関わる専門職として，幼児の性の健康にどう関わるのかといった教科や内容に関しては，一部虐待に関する学習以外では学習の機会を得ていない。

また性はタブーという社会的な風潮の中で，自身の家庭において親から性教育を受けている学生もほとんどいない。そのため幼児の性的な発達や発達課題，ことにプライベートゾーンの学習が自分や他人の性的人権を守るための基盤になることや性暴力から幼児を守るための具体的なスキルにつながることなどについては知らず，新鮮な驚きをもって，講義を熱心に聞いていた。そして保育所実習では，実際の幼児の性的な言動や性的な行動を目の当たりにしたときに，講義での学びを生かし8割を超える学生が，その言動や行動に対して何らかの対応を行っていた。さらに保育所実習での学生の対応を軸に講義を重ねての幼稚園教育実習では，９割を超える学生が園児の性的な言動や行動に対応していた。その対応の内容も，単純にその言動や行動を制止する学生の割合が69％から21％に減り，プライベートゾーンであることの理由づけをする学生の割合が19％から67％に増加した。

これらの結果は学生の意識が大きく変わったことを意味し，講義が学生の一定の行動変容につながっていると言えるだろう。保育所実習の前に，子どもたちの性的な発達とプライベートゾーンに関する子どもたちの実態と発達課題およびその関わりについて知らせたことで，学生に安心感をもたらし対応しやすかったのではないか。さらに１回のみの一方通行の講義だけでなく，２回目の講義で，振り返りを行いどのような条件が子どもたちに有効であるのか，実際に自分達が対応に困ったケースやうまくいったケースを取り上げて，考える機会を持ったうえで，幼稚園実習に臨んだことが，知識の定着率を上げ，より望ましい対応へと変化させたのではないかと考える。

幼児の性的発達は，２才半から３才でほとんどの子どもが自分の性別を認識するようになり，そのことが性別役割分業意識と行動をつくっていく。男女の性別に自らを自己分類することで，性別に応じた世界をつくりあげると浅井は述べている。保育所や幼稚園での園児の性的な言動や行動はその表れであり，よく見られることであろう。しかしその言動や行動はただ単に子どもらしい内容だからそのままでいいとは限らない。子どもは自分の身体を通して，また他の子どもや子どもと関わる大人との関わりの中で，自分や自分の身体，自分の性をどう見るか価値観や対処法を学んでいく。

子どもが自分や自分の身体やこころを大切に思い，自分でも守っていけるように，意図的に大人が関わることが，大切である。そしてそれは，家庭だけに委ねられるものではなく子どもに接する大人，すなわち保育士や幼稚園教諭も含めて子どもを取り巻くすべての人が，大切な知識を共有し,同じ価値観で関わっていくことである。学生たちが将来，保育士・幼稚園教諭という子どもに関わる専門職として，子どもの性の健康について意図的に関われるようにさらに継続していきたい。本学だけではなく養成校の中で，広く取り上げていくことが必要だと考える。

今後の課題としては，講義レベルでは，０，１才児が胸を触ったり性器を触ったりすることも性的な言動や行動と受けとる学生が複数いたことから，乳児期のスキンシップと混同して信頼関係構築に問題を生じないように，性の発達に応じた働きかけについて確認をすることが必要である。また子どもの性器いじりと自己肯定感との関連，自己肯定感を高めるために必要な関わりや虐待の加害者にもなり得ることを念頭においた専門職としての倫理についても追加していくことが必要と考えている。さらに，子どもの性の健康を守るためには，子どもをを取り巻く大人が同じ価値観で子どもに関わることが

重要である。保護者やすでに専門職として従事している保育士や幼稚園教諭などが，子どもの性や子どもの性の健康に関して，どのような意識を持っているのか，調査を行う必要を感じている。

警視庁の報告では,2012年１年間に警察が,虐待があったとして児童相談所への通告対象にした18才未満の人数は，前年比42.1％増の１万6387人となり，統計を取り始めた2004年以降で最多だった事が分かった。その内訳は，心理的虐待が8266人（50.4％），身体的虐待が5222人（31.9％），ネグレクト2736人（16.7％），性的虐待が163人（2.6％）であった。また昨年の児童ポルノ製造や提供による摘発は1596件（前年比9.7％増），摘発人数は1268人（24.8％増）で，インターネットを利用した事件が1349件（84.5％増）と著しく増加したことが分かった。子どもたちを取り巻く環境はますます厳しく，子どもたちの健やかな成長・発達のための取り組みは急務と言わざるをえない。

今回の調査で，学生の園児への対応の変化から，講義によって一定の成果が得られたと考える。学生たちが，これらの体験や学びを足がかりに，今後実際の職場に出たときに，園児に対する性の健康教育の一翼を担い，子どもたちが，性的暴力の被害者にも加害者にもならないように取り組んでいけるように期待したい。

お　わ　り　に

第３報では，保護者や実際に子どもたちと関わっている保育士や幼稚園教諭の意識について明らかにしていきたい。

引用・参考文献

１）２）田上時子，知っていますか？子どもの性的虐待一問一答，解放出版社，2002年
３）奥山真紀子･浅井春夫，子ども虐待防止マニュアル，ひとなる書房，2008年
４）メグ・ヒックリング，メグさんの性教育読本，木犀社，2004年
５）浅井春夫編，はじめよう！性教育，ボーダーインク，2012年
６）田上時子他，暴力防止の4つの力　ワークで学ぶ子どものエンパワメント，解放出版社，2008年
７）Ｓ･クーパー森田ゆり監訳,「ノー」を言える子どもに，童話館出版社，2000年
８）Ｊ・サツーロ他三輪妙子訳，男の子を性被害から守る本，築地書房，2004年
９）季刊　SEXUALITY，　性教育のこれまでとこれから No51，2011年
10）ローリー.フリーマン　わたしのからだよ！いやなふれあいだいきらい　木犀社　2001年
11）安藤由紀監修，Say“No！“やめてといおうー悪い人から自分をまもる本，岩崎書店，2004年
12）原田眞澄　西尾敏子　保育学生が園児から受けたプライベートゾーンに関する言動・行動と対応の実態　第1報　中国短期大学紀要　2005年
13）原田眞澄　西尾敏子　子どもに対する性の健康教育のあり方　岡山県小児保健協会研究発表会抄録集　2012年